

サルの魚つり（養父町奥米地）

むかし、昔。どこだか知らんけど、サルが歩いとると、クマが、サケをかたげて（かついで）出て来た。

「クマさん、クマさん。そのサケは、どなえして捕らなつた。」

「大（おお）うけなサケじゃろうが。わしは、手でつかんだ。が、おまえなら、しりほ（尾）で釣（つ）るがええ。」

「あら、わしのしりほで、サケがつかれるかいな。」

「うん、つかれる、つかれる。しりほを、池の中につけとると、わけもないつかれるがな。」

「そうか、ほんなら、わしも釣ってみて、釣り方を教えてくれいや。」

「そら、やすいこっちゃ。今夜はよう冷えるで、大（おお）けえのが釣（つ）れる。今夜、池のはたに来え。」

サルは、大よるこびで、日が暮れるのを待って、池のはたへ行きました。しかし、クマは、なかなか来ません。サルが「だまされたかな。」と思って、帰りかけると、ニタニタとうす笑いを浮（う）かべて、クマが出て来ました。

「サルどん、もう来ておったか。まんだ早いが、この木につかまって、しりほを池へつけてみいや。」

「よしや。こうしたらええか。」

サルは、教えられたように、池のそばの木をかかえて、尾を水の中につけると、クマは

「もっと、しりほの元までつけいや。けつが、つかるぐらいつけたら、大うけなのが釣れる。」

サルが、居（い）ずまいを直して、おしりも水につけると、

「サルどん、それでよかろう。そのまま、じつとがまんしとれ。いごと、つれかけたサケがにげるぞ。」

サルは、言われたように、じつとがまんしとると、夜がふけるにつれて、池に氷がはりはじめた。

「クマさん、けつがピリピリ痛いのが。」

「そうか、ほんなら、サケがつつくんじゃ。がまんしとれえよ。」

「チクチクと、針でさすほど痛いのが。」

「そうか、ほんなら、大うけなのが釣れるんじゃ。がまんしとれ。」

いうて、クマは山へ帰っていきました。サルは、痛さをがまんして、サケの釣れるのを待っていました。

そのうち、サルは、もう、がまんできなくなり、しりほをあげよう、とすると、いてついたしりほは、ビクとも動かん「サテこまった。」と、もがくが、どうにもならん。

やがて、東の空が明るくなりかけたので「このままでは、人に見つかって殺されやも知れん。」と思ったサルが、かかえていた木をたよりに、かまかせに立ちあがると「ブツーン」と、音がして、しりほが、根本（ねもと）から切れてしまった。

それでその時から、サルのしりほ（尾）はなくなり、顔が赤くなったそう。

